深沢七郎論

―「楢山節考」の夢の崩壊過程について―

木村東吉

1　はじめに

本稿は、深沢七郎における思想的変化の跡をたどるとともに、その変化の仕方の特色を明らかにすることを目的としたものである。

高橋和巳は、深沢七郎の作品群をその素材面から三分類して、底辺層の農民生活を素材としたもの、都市生活の舞台裏をさすらう現代ジプシーの生活を素材にしたもの、彼自身の経歴を素材にしたものとエッセイ、というように分けている。この分類は、深沢七郎の作品群の全体像を手ぎわよくとらえたものである。

ところで見方を変えるならば、この作者の作品群を、想像を主体とした作品、傍観的認識を主体とした作品、体験的認識を主体とした作品、というように分けることもできるであろう。そしてこのような分類をしてみると、高橋の分類で〈農民もの〉に所属する作品のうち、すぐれたものは、多く想像を主体とした作品群に属し、〈現代ジプシーもの〉に所属する作品のうち、すぐれたものは、多く傍観的認識を主体とした作品群に属していることがわかる。また、〈経歴ものおよびエッセイ〉の多くは、体験的認識を主体とした作品群に属している。

このように見てきた上で、筆者は、深沢七郎の作品群の中から〈農民もの〉のうち想像を主体とした諸作品を選んで、これを考察の対象とすることにした。作者の想念の世界を窺うためには、作者の想像を主体とした作品を調べてみるのがよいと思われたからである。想像を主体とした作品には、「風流夢譚」やポルカの類などもあるのだが、〈農民もの〉に限定したのは、以下の作業において作品の相互の比較をやりやすくするためである。

このように作品を限定してみると、これらの諸作品の中に描かれた人物には、類型化されたものが多いことに気がつく。たとえば「楢山節考」の三人の主要人物、根っこのおりん、辰平、銭屋の又やんは類型化された人物の典型であるが、この三人は、姿や形を変えながら以後の作品の中に必ず登場してくるのである。もう少し具体的にいえば、おりんの場合は、「笛吹川」ではおけいに、「庶民烈伝」ではおくまになって現われており、辰平は、「笛吹川」では定平に、さらに「庶民烈伝」では、べえべえぶしの善兵衛に、それぞれ面影を通わせている。そして銭屋の又やんの姿は、「笛吹川」ではワカサレの一家として、さらに「庶民烈伝」では「お燈明の姉妹」の姉妹や「安芸のやぐも唄」のおタミにと、形を変えて現われている。

このように、作中人物を系列化してとらえることができるということは、それ自体、その作中人物が類型的であるということの一つの証

拠といえる。また、後から書かれた作品の中に現われる人物が、最初の作品の中にちゃんと顔をそろえているということは、それだけで、作者の想念の世界の基本構造ともいうべきものに大きな変化がないということを意味していると解釈できる。これは深沢七郎の特色の一つである。

けれども、このように巨視的な視野に立って共通項を引き出し、それによって作家の本質的なものをとらえたとする、いわば概括的把握から観念的抽象化への道筋をたどるやり方だけで、作者の特色のすべてがわかるわけではないそうしたことも必要であるが、一方では、非共通の部分、すなわち変化する部分についても知る必要がある。変化の仕方もまた、作家の本質的な特色を表わすからである。今までの深沢七郎論は、作家の変化しない部分について論じたものが多かった。しかし、一人の生きた作家が、その時々の感慨をこめて描き出した作品である以上、何らかの変化が認められるのが普通であろう。事実、深沢七郎の書いた諸作品中に現われる同型の人物と見られるものにも、少しずつ変化の跡を見ることができるのである。ただ、その変化に意味を見いだすか否かは読者の側の問題である。

本稿では、以上のような見地に立ってその変化する部分に注目し、その変化の意味するものについて考えてみたい。

2　おりんからおくまへ
ー価値共同体の崩壊ー

「楢山節考」の主人公である根っこのおりんと、これと同系列に属する数人の作中人物について検討することから始めよう。

おりんは死ぬべき人間として運命づけられており、彼女は自分の死を完全無欠なものにするために全力を傾注している。息子の後妻のことを心配し、その後妻に自分の知識のすべてを伝えるのも、自分の死後に息子が困らないようにするためである。石臼に歯を打ちつけて歯を折るのも、十分年寄りらしい姿になるためである。儀式として定められている振舞いの酒も準備するし、曽孫の顔を見るのは恥ずかしいこととされているので孫の嫁の出産日を気にし、それ以前に死ぬために予定を早めて山に登る。そして、山頂の雪に包まれて死んでいく。

このおりんの生き方には、自分の本能的欲望を主張しようとする姿勢はまったくなく、彼女は自己犠牲の道を誇り高く歩んでいるのである。ここで注目すべきことは、おりんの生き方や誇りが地域社会の価値体系に完全に合致していることである。そのために、彼女の行動の一つ一つが、息子や地域の人々にごく自然に理解されているのである。たとえば、息子の辰平は、おりんが何も言わないのに、彼女が山に行くつもりでその準備をひそかに整えていることを知っている。そして、それを自分がどうしてやることもできないことを思って、一人雑巾で顔を隠して泣いたりする。おりんもそれを見つけて、無言のうちに息子の心を感じとっている。無言のうちに、あらゆることが相互に理解されているのである。また、おりんが楢山の山頂についた時、雪が降り出したということは、村人全体が〈運が良い〉と思うことであった。おりんが山に行ったことを誰一人として口にする者はないが、それでいて知らぬ者もないという社会である。

このように、おりんは自分の考えていることや行動について一言の説明もしていないが、辰平や村人にすべてが通じているために、彼女

は孤独に陥ることなく、自分の生き方を貫くことができたのである。だからその生き方は、自己犠牲の生き方ではあったけれども、自己の誇りを守り通したという意味で、十分幸福であったといえるものである。

このようなおりん像は、どのようにして作者の中に生れ、作者はこれについてどのように考えていたのであろうか。その点について参考にすべき作者自身のことばがある。木山捷平との対談である。

木山　「楢山節考」は一番はじめのヒントというか、書きたいと思ったのはどういうことだったんですか。

深沢　自分のおふくろのことですね。今は捨てられるんじゃないけど、ガンでもう見放されちやってね。そういう場合になったらこんなような気持になるんじゃないかしらと思って。

（略）　（「秋の夜譚」）

この深沢のことばを手がかりとして彼のエッセイや〈経歴もの〉の系列のものを見ると、その中に彼が描き出している母親の像と、「楢山節考」の根っこのおりんの像との間には多くの共通点が見いだされる。たとえば次のようなものがその一例である。

母の病名は肝臓癌だった。（略）母は死ぬことだけは早くから知っていた。死ぬということを怖れてもいなかったし、病名にかかわらず死ぬと知っているのだから、このような残酷な名を話すことは私にできなかった。

私の母が死んで、形見わけの時だった。（略）みんな処理した後で気がついたことは、母が誇り高い女であったことだった。春頃から、安物らしい物は手伝いに来てくれた人達にやってしまったり、捨てたりしていたのでつまらないものは一つもなかった。

（「柞葉の母」）

ここには、自分の死ぬべき運命を自覚して、その死を恐れもせず、完全無欠なものとすべくひそかに死の準備をしていた根っこのおりんと、ほぼ同様な人間像を見いだすことができる。

このほか、小説中の場面を彷彿させるものもいくつかあり、「思い出多き女おッ母さん」などには、作者自身がそのことを指摘している部分もあるほどである。そうしたものの中から一例をあげるならば、次のようなものがある。

この十月六日は母の命日だった。（略）私の郷里では人が死ぬと、そのあと七日のうちに雨が降らなければその人は天命で死んだのではないと言われていた。だから、死んだあと七日間に雨が降れば「ああ、あの人は寿命がなかったのだ」とあきらめるのである。母の葬式の日は快晴だったが、その夕方から雨が降り出した。私は雨をあんなに美しいと思ったことはなかった。

（「自伝ところどころ」）

これを見ると、実母を失った時の体験が、「楢山節考」の結末部分の、楢山山頂においておりんを包むように雪が降り始める美しい場面へと理想化されていることがよくわかる。

この理想化の方向や、作者が母親と同じ肝臓癌で死ぬことを理想としているとしばしば述べていることなどを見ると、根っこのおりんの生き方は、そのまま作者自身の理想であったと考えられるのである。すなわち、おりんは作者の母の理想化された像であると同時に、作者の夢を託した人物だったということができる。

ところで、既に述べたように、根っこのおりんと同型の人物は、深沢七郎のその後の作品にも現われているのであるが、それらの人物はどのように扱われているであろうか。次にその点を見ていくことにする。

おりんと同型の人物としては、自己犠牲的な生き方をしている点だけから見れば、「東北の神武たち」のおかね婆さんもこれに入るかもしれない。しかし、作中でのイメージはかなり異なっている。運命に従順で自己を主張することがないという点もつけ加えるならば、「笛吹川」のおけいがこの類に入るであろう。しかし、おけいの場合は年令的に若いためもあって、少しイメージがずれており、おりんの前身を思わせるものである。そうした中にあって、「庶民烈伝」その一の「おくま嘘歌」の主人公おくま婆さんは、もっともおりんに近いイメージを持つ人物である。

おくまは、夫のために、夫の死後は息子、娘、嫁、孫のために、ひたすらつくしてその報いを求めない。自分が疲れていることを知れば相手がそのことを気にかけるようになると考えて、疲れたことを隠すために嘘をつく。七十二才の春病気になり、病気がたとえ回復しても思うように身体が動かないだろうと察すると、自らひそかに死の準備をする。〈舌がまずい〉ということを理由にして、栄養物を避けるのである。しかし、周囲の者たちはおくまの真意を察知できないままに月並みの親切をつくすのである。臨終に際してさえも、次のようなありさまである。

おくまは死ぬ時も嘘を言った。枕許で息子夫婦やサチ代が、

「よくなれし、よくなって」

と言って泣いてくれるので、

「ああ、よくなるさよオ、よくなって、蕎麦ア拵(こしら)えたり、サチ代のうちへも遊びに行くさ」

と言った。

おくまにとっては自分から準備した覚悟の死なのであって、今更〈よくなれし〉といって泣いてくれても仕方のないことなのであるが、最後まで周囲に自己の真実を訴えようとはしないのである。このことによって、もし周囲の人々が、彼女の死は彼女自身によって準備されたものであったと知った場合には、当然持たなければならなかった心の負担は、未然にしかも永久に葬られたわけである。

おくまは、このように徹底的に自己を犠牲にして、自分の存在が周囲に迷惑になると悟ればひそかに死を準備し、死を恐れることもなく、自分の生き方を貫いたわけである。これらの点で、おくまとおりんとは共通している。にもかかわらず、おりんの死は一つの生き方の完成として美しく、一種の幸福感を伴うものであったのとは反対に、おくまの死は、同じく一つの生き方の完成でありながら、あまりにも孤独であり、悲壮感を伴ったものになっている。それは何故であろうか。

結論から言えば、おくまの悲劇は周囲の情況の変化によるものである。おりんの場合は、極端な物質的欠乏の中にあったけれども、おりんの心持ちのすべては辰平や村人に通じていた。だから、彼女は自分の行為について一言の説明も必要としなかった。これに対しておくまの場合は、物質的には一応満たされており、周囲の人々も彼女を大切にしているのであるが、真の意味で彼女を理解していないのである。おくまの嘘を嘘と知ってこそ、おくまのやさしさの真の姿が理解でき

るのであるが、そのような理解者が周囲になかったことが、おくまの死を孤独で悲壮なものにしているのである。

では、何故おりんの方は周囲の人々から理解されたのに、おくまのほうはそうならなかったのであろうか。それは一言に言って、「楢山節考」の世界において存在していた価値共同体といったものが、「おくま嘘歌」の世界において崩壊しているためである。そして、このような差が生じる原因は、作品世界の情況の相違にあると考えられる。「楢山節考」の世界においておりんが持っていた価値観は、いわば周囲の情況的要請に適応したものであった。したがってそこには、村人全体がこれを認める必然性があった。これに対しておくまの場合は、周囲の情況が必ずしも彼女のような生き方を要請するものではなくなっていた。このために、彼女の価値観を周囲の人々が共通に認める必然性がなくなっているのである。その結果、「楢山節考」の世界において見られたような無言の共感関係が、もはや成立しなくなったのである。このように見てくると、おくまが悲壮なまでに孤独な道を生きなければならなかった理由は、結局情況の変化にあったということができる。

「おくま嘘歌」は、「楢山節考」より五年後に発表されている。また、「楢山節考」は舞台が過去の閉鎖的な山村に求められているのに対し、「おくま嘘歌」のそれは現代の開放的な近郊農村に求められていることも注意される。これらのことから、作者は「おくま嘘歌」において、かつて自分の理想を託して描いたおりんを、価値共同体の崩壊した社会（これはそのまま価値観の多様化した現代の社会情況と同じものである。）の中において描いてみようとしたのではないかと筆者は考える。もしそうだとすれば、作者は「楢山節考」に描いた理想が現代においてもはや通用しなくなったことを、確認しなければならなかったはずである。

このような事態を知った作者は、その後においてどのような変化を示しているであろうか。作品を今一度振り返ってみると、作者がおくまを描いた時には、おりんを描いた時のような理解を示していないのである。どこか身をかわして、おくまを冷静にみつめているところがある。それはおそらく、作者自身の考え方の中に、おりんを描いた時とは異なる何物かが生じていたからにちがいない。次にその点を見ていくことにする。

3　又やんからおタミへ
―孤独なる自己本位の確立―

「庶民烈伝」その一の「おくまの嘘歌」が発表されたのは昭和三七年であったが、その二の「お燈明の姉妹」はその翌年に、その三の「安芸のやぐも唄」はさらにその四カ月後に発表されている。そしてさきにもふれたように、この二つの作品の主人公は、いずれも「楢山節考」において、おりんと対置して否定的に描かれていた銭屋の又やんと同じ型に属する人物である。おくまの運命を見とどけた作者の関心が、かつては否定的に見ていたものに向いているということは興味を引くことである。そこで、この銭屋の又やんに代表される系列の人物たちの間に、どのような変化が見られるかについて調べてみることにする。

「楢山節考」において、銭屋の又やんが根っこのおりんに対置する関係で描かれていることは、二人の死の場面を比較してみれば明らか

である。おりんは雪に包まれて念仏を称えながら眠るように死を迎えているのに対して、又やんの方は罪人のように縛られて地獄の谷に蹴落とされ、鳥の餌食にされるのである。おりんの方が理想化されているのに反して、又やんの方は極端に醜悪化されていることが知られる。

では、何故又やんの方は否定的に扱われなければならなかったのであろうか。作品中に次のような表現がある。

銭屋の老父は又やんといって今年七十である。おりんとは隣り同士の上、同じ年頃だったので長い間の話し相手だったが、おりんの方は山へ行く日を幾年も前から心がけているのに、銭屋は村一番のけちんぼで山へ行く日の振舞支度も惜しいらしく、山へ行く支度など全然しないのである。だからこの春になる前に行くだろうと噂されていたが夏になってしまい、この冬には行くらしいのだが行く時はこっそり行ってしまうだろうと、陰では言われていた。だがおりんは又やん自身が因果な奴で山へ行く気がないのだと見ぬいていたので、馬鹿な奴だ！といつも思っていた。おりんは七十になった正月にはすぐに行くつもりだった。

筆者はさきに、おりんが自己犠牲の道を誇り高く歩んだ女として描かれていると述べたが、そのおりんの方は〈山へ行く日を幾年も前から心がけている〉のに対して、又やんの方は〈村一番のけちんぼで山へ行く日の振舞支度も惜しいらしく、山へ行く支度など全然しない〉ばかりか〈因果な奴で山へ行く気がないのだ〉としている。山へ行くことは死ぬことを意味しているのであるから、又やんが山へ行きたがらないのも無理はない。また、食料の極端に欠乏しているこの村にあって、又やんが振舞支度を惜しむのも、むしろ当然かもしれない。しかし、そうした又やんのあり方も、我欲を捨て去って自己犠牲の道を歩んでいるおりんに対置してみると、〈村一番のけちんぼ〉となり、〈因果な奴〉となるのであろう。このように見てくると、又やんは我欲に執着する人間であるために、作者から否定的に扱われたのであることがわかる。

深沢七郎が、人間を欲の面からとらえて描く作家であることはすでに指摘されている。彼の作品には、我欲に執着する型の人物が数多く登場してくる。たとえば、習作期の作品「魔法使いのスケルツオ」では、村一番の金持ちと思われるほど金を貯えていながら、姑に食事を与えず、ついに餓死させる老婆おつまが描かれ、「笛吹川」では、欲のために代代息子が親を追い出してしまうワガサレの一家が描かれている。また、「庶民烈伝」の中の「お燈明の姉妹」における姉妹たちや「安芸のやぐも唄」におけるおタミなども、我欲に執着しているという点でこの系列に含められるのである。

しかし、「おくま嘘歌」よりも早く書かれた作品と、それ以後に書かれた作品とでは、これらの人物たちの描かれ方が大きく変わっている。前者においては、作者はおつまに対してもワガサレの一家に対しても否定的であるのに比べ、後者のお燈明の家の姉妹やおタミに対しては明らかに寛容になっているからである。

この点をいま少し詳しく見ていくことにしよう。

「魔法使いのスケルツオ」においては、ブドウの売買と金貸しとを営み、ケチな暮らし方をしているために、村では一番お金を持っているかもしれないと噂されているおつまは、九〇歳を越した姑を犬のように扱うばかりでなく、食事も満足に与えない。二人の息子も母の金

をせびりに来るばかりなので、母子の仲も悪い。ある日、長男がおつまを死ぬかと思われるほどの目にあわせて、強引に金を取って行ったために、おつまは姑にやつ当たりをして食事を与えなくなる。そこで姑は餓死してしまう。ところがその葬式になると、近所の人々や息子たちがわっと集まって来ておつまの家の米をむさぼり、息子たちにいたっては自分たちの飲み代までおつまに払わせるので、おつまは泣き出してしまうというのである。欲張りな人間と、これに対する社会の制裁とを描いたものであるといえよう。明らかに、おつまは否定的に見られているのである。

「楢山節考」の銭屋の又やんは、わずかに村の掟よりも長く生きたいという人間の最低の欲望さえも否定され、まして、自家の食料を確保するために芋を盗んだ雨屋の亭主は、そのために一家全員が殺されかねないので村に住めなくなる、というほどの制裁を村人から受けている。そして、「笛吹川」のワカサレの一家は、代々の息子が親を追い出すというのであるが、周囲から冷笑の目で見られる一家として書かれている。いずれにしても、ここまでは作者が一貫して人間の欲を否定する立場に立っていることがわかる。

ところが、「庶民烈伝」その二の「お燈明の姉妹」や、その三の「安芸のやぐも唄」になると、その主人公たちの描かれ方が変わってくる。「お燈明の姉妹」における三人の姉妹は、着物や男のことでそれぞれ争うのであるが、結局三人とも最後には自分で満足している。そして社会からの制裁も受けていない。そのためもあるのだろうが、「魔法使いのスケルツォ」のおつまにしても、「楢山節考」の又やんにしても、自己の欲を制することができないという意味で弱い人間としてのイメージがあったのに比べて、この三人姉妹には、社会的束縛から自由であるとともに、自足することを知っているという意味で、強い人間としての印象が濃くなっている。

「安芸のやぐも唄」のおタミについても、ほぼ同様のことがいえよう。おタミは原爆のために失明し、子も孫も失った。いわゆる原爆孤老である。彼女は二畳の畳と三尺の土間とのバラックに住み、あんまで暮らしをたてている。手続きをすれば生活扶助が貰えると街の人が教えてくれても、おタミは断わる。そして、原爆記念日の〈歌の行進〉を聞きつつ、〈あの七色の雲の光景〉を思い浮かべていた時、隣の人が向こう前の家の葬式の香典を集めに来るが、おタミはそれを出さない。その直後にその葬式のある家の隠居があんまを頼みに来ると、彼女はそれを引き受ける。そのあんまをしながら、彼女はふと自分の姿を振り返ってみる。そして、次のようなことを考える。

おタミは自分の姿に気がついた。義理だとか、恩だとか言っていた息子の茂雄とは全然、違っている自分に気がついたのである。息子も娘たちもいなくなったし、孫だちもいないが、ただ1ツ、おタミはかたく抱いているものがあったのである。あの七色の雲が現われたときから、ただ1人で生きていくことしかないのである。死んでいくことも怖れないが、1人だけで生きていくことも怖れない。なにも怖れない自分のちからをかたく抱いているのである。

おタミは、そう考えてみると、あの七色の〈雲の中には1人で生きることを教えてくれた不動明王のような神が住んでいるのだと気がついた。〉ちょうどそんなことを考えている時、原爆被災者救援事業の

資金集めの人が入って来る。その人に対しておタミはつばを吐きかけた。以上が大体のあら筋である。

おタミは、自己肯定的な生き方を貫いている点では、銭屋の又やんと同じ系列に属する人物であるが、生活扶助を断わっているあたりを見ると我欲のとりこになっているのではない。この点で彼女は、「魔法使いのスケルツオ」のおつまとは明らかに異なっている。彼女は、向こう前の葬式への香典を断わりながら、その家の隠居のあんまは引き受けるなど、我欲に凝り固っているようにみえる一面もある。しかし、我欲に支配されていない。社会的義理を否定し、社会的連帯の中に生きることを拒否して、孤独の中に生きる道を見いだしているのである。彼女の孤独の中に居直った強さは、むしろ感動的でさえある。

また、作者がおタミの生き方に対してかなり寛容になっていることは、注目すべきことである。

これまで、この我欲に執着する型の人物を描く時、作者は常に外側から傍観的に描いてきたのであるが、「安芸のやぐも唄」のおタミを描いた時には、モノローグの形を多く使っている。これは、「楢山節考」のおりんや、「笛吹川」の定平を描いたのと同じ手法である。この点からすれば、作者が、おタミをおりんや定平と同じ位置に置いて見ているということもできよう。このことは、作者自身、この時になってようやく、我欲に執着する人間を身近に引き寄せて理解するようになったことを示している。

このような作者の変化は、ただ単に作者の作家的成長ということにつきるのであろうか。作家的成長であることには違いないが、その成長は何がもたらしたものなのであろうか。

注意すべきことは、作者のこのような変化は、「おくま嘘歌」を書いた時を境にして起こっているということである。

おくまが他にすべてをささげつくしてもなお孤独で悲壮な生き方をしなければならなかったことを確認した作者は、自己犠牲的な生き方も、結局自分一人のひそやかな満足に終るのであれば、おタミの生き方もまた、彼女自身満足しているのであるから、認めなければならないことを悟ったのであろう。いうなれば、作者のこのような考え方の変化は創作を通して体験的に自覚されたのである。

ここで確認すべきことは、この作者は、おくまの生き方が情況に適さなくなったと悟った時、すんなりとおタミの生き方を肯定していることである。ここには、おりんと又やんとを改めて対決させてみようとする姿勢も、対決させることからより普遍的な思想を導き出そうとする姿勢もない。情況の変化に応じて、作者の方も変化しているのである。

ちなみに、「楢山節考」から「安芸のやぐも唄」までの作者のこのような考え方の変化を、母親の影響力からの脱却の過程であると見ることもできるかもしれない。「楢山節考」のおりんが作者の実母を理想化したものであることはすでに述べたが、おタミに対して作者が寛容になっているということは、作者がおりんの価値観から自由になっていることを示しているからである。

それはさておき、この時点において作者が孤独な、しかし力強い自己本位の道を見いだしていることは、認めなければならない。そして作者が、心理的な意味において社会との絶縁状態の中で生きる人物に注意を集めていることも興味あることである。

4　辰平から善兵衛へ
―農村幻想の崩壊―

最後に、「楢山節考」の辰平に代表される型の人物についてであるが、この辰平にしても、「笛吹川」の定平にしても、不思議に影の薄い人物である。辰平の場合、作品の主人公はおりんであり、彼はいわば視点人物の位置に置かれているのだから、そうなるのもやむを得ないかもしれない。けれども「笛吹川」は、中心的人物定平の一代記といった側面を持っている。にもかかわらず、定平もまた、実在感の希薄な人物であるという印象をぬぐいきれない。

だが、作者は定平に単なる視点人物というだけでなく、一つの生き方として、積極的な意味を持たせようとしているようである。「笛吹川」には、戦国時代の武田の領内を流れる笛吹川の側にあるギッチョン籠と呼ばれる家を中心にして、ほぼ定平の生涯にわたる期間のことが描かれている。このギッチョン籠の人物は、庶民層としては有能な人たちばかりで、家を出て行った者は武将となったり、武将の妻となったり、あるいは豪商の妻となったりして、それなりの成功をおさめている。しかし定平は、彼らの成功を羨むでもなく、息子たちが家を出て行くことについては、むしろ迷惑な思いで見ている。そして、家を出て行った者たちはことごとく死に果て、定平が一人生き残る。以上が、この小説の概略である。

農業を離れて一時的に成功してみても、それは結局死期を早めることでしかない。だから、いかに地味であっても、農業にかじりついて生きて行く者の方が良いのだと作者はいっているように見える。

この点について、作者は次のようなことを述べているが、これも一つの示唆になると思う。秋山駿との対談である。

深沢　そのあと「笛吹川」を書いたんですがね。「笛吹川」の時には年代を調べました。（略）

秋山　あとはあんまりお調べにならないですか。

深沢　ええ、考えてね、大体こんなようなこと、人間というものは考えていたんだろうっていうふうなことで。そうして、出来上ってから気がついたけど、戦争中に似てましたね、あの「笛吹川」が。

秋山　今度の戦争中のようですか。

深沢　のようなところが、少しあるなと思いました。（「私の文学を語る」）

第二次世界大戦中、人々は農業を捨てて都会に流れ込んでいき、なかには軍人になったり、事業に成功したりして、一時羽振りの良かった人もあったろう。けれども戦争が終わった時、たとえ貧しくとも、最後まで安定した生活を守り得たのは、農村に残っていた人々であった。定平の場合も、その点で似通っているということはできる。定平の生き残った姿はあまりにも寂しげであるけれども、定平の生き方こそ正しかったのだと作者はいっているように見える。たとえば、小説の末尾に次のような表現がある。

黙って米をといでいると、橋の上から、「そんなとこで米をといで、すぐ川かみにゃ人が死んでるぞ」

と言われた。定平は下をむいたまま（ふん）と思った。川を眺めながら、

「三寸流れれば、お水神さんが清めるぞ。」
と、口の中でブツブツ言った。

ここに表わされた定平の態度には、意志的に世情のことに背を向けて、土に密着して生き、土を信じて生きようとするものがあるように見える。

このように見てくると、作者にとって、土に密着して生きることはそれがたとえどんなに地味な生活であっても、けっして、しみったれたものとしてみじめな感じになるものではなく、むしろ満足の得られるものであると考えられていたのであろう。事実、作者は、農業をすることが若い頃からの夢だったと幾度も述べているのである。これらのことを考えあわせると、「楢山節考」の辰平や「笛吹川」の定平の生き方は、ある意味で作者の理想を反映したものであったと見られるのである。

しかし、それでは「楢山節考」や「笛吹川」には、本当の意味での農村生活が書かれているかといえば、決してそうではない。農村生活の主要な関心事であるはずの営農に関すること、「隣」や「親類」に関することは、何一つ現実味を持って書かれていないのである。「楢山節考」における雨屋の亭主の泥棒事件にしても、あまりに乾いた感じの事件処理であって、現実味はない。表面は穏やかであっても、内面では陰湿な農村の人間関係がまったく欠落しているといってよいのである。だからこそ、この作品は悲惨な状態におかれた農村を舞台としていながら、意外にさばさばしたものになっているのである。また「笛吹川」に描かれた世界には、村落共同体といったものさえ存在していないといってよい。

では、何故このような農村が書かれたのであろうか。

その原因の一つには、作者自身が農村生活の内情を実際によく知らなかったということもあるであろう。しかし、そういう作者も農村を外部から見て知ってはいたわけで、そうした外部から見て得た知識をもとに、想像されたのである。その場合、作者が農業に対して夢を持っていれば、そこに生まれる想像世界が、作者の好みのものとなるのは必然である。だとすれば、「楢山節考」や「笛吹川」に描かれた農村に実在感が希薄であるという点は、作者の農村生活の内情に対する知識不足のためであろうが、その内部における人間関係のあり方などには、作者の好みが反映していると見てよいわけである。

では、これらの作品に書かれた人間関係において、基本的特徴といえるものは何であろうか。それは、辰平にしても、定平にしても、肉親や夫婦以外の者との交渉をまったくといってよいほど持たないで、閉鎖的な世界に住んでいるということである。この点に気づいてみると、作者にとって、農業に生きるということは、自給自足的な閉鎖された生活を意味していたのだということがわかる。

ところで、幼児などが箱や家の隅などの薄暗い所に身をひそめ、外界との交渉を避けたがることがあるが、これはフロイドによって退嬰行動と名付けられている。その説に従うと、このような幼児の行動は、幼児が現実に適応できない時にとる行動で、母の胎内に帰りたいという願望に従った行動だともいう。そこで筆者は、「楢山節考」の世界が、閉鎖的な社会であること、母のイメージに結びついていること、辰平がきわめて非行動的な人間であることなどから、それは、作者の退嬰的な夢を描いたものではないかと考えられるのである。農耕生活

がそのまま自給自足的、自閉的な生活形態だと想像されたために、作者の退嬰的な願望と結びつき、そこに彼の農村のイメージができあがったのではないかと考えられるのである。

ところで、このような農村幻想を持っていたと考えられる作者は、「おくま嘘歌」や「安芸のやぐも唄」を書くことによって、「楢山節考」の世界を支えていたところの自己犠牲的な生活をよしとする価値観の崩壊あるいは相対化を確認しなければならなかったのであるが、しかし、同時に、そのことによって、孤独ではあっても自在な自己本位の道を見いだしたのであった。そうなると、社会から絶縁されて自在に生きる最も理想的な場所は農村だと考えられたのであろう。何故なら、おタミの場合はまだ社会と対決的立場に立たなければならないが、農村が彼の考えたようなものであったならば、対決すべき社会的人間関係が希薄だからである。実際彼は、五十才を越えてから農村への移住を敢行し、農業を始めたのである。

筆者は、深沢七郎という人が理づめで自分の行動を定めている人であるとは考えていない。けれども、昭和三九年に「安芸のやぐも唄」を書き、昭和四一年に農村への移住を五十才を過ぎた身で敢行した作者の心の中をさぐってみれば、さきに考えたようなことも、彼の行動の動機の一部にあったと考えてよいであろう。そして筆者がここで注目したいことは、彼の行動が現実に対して身をのり出していく姿勢によるものではなく、現実社会から身を退く方向に向かっているということである。

それでは、深沢七郎にとって、農村体験はどのようなものであったろうか。一口にいって、彼は農耕生活は好きであるけれども、農村生活には失望しているといってよい。「生態を変える記」によると、彼は、農村の寄り合いの席に居たたまれなくなって脱け出したりしている。また、彼の営農法は、企業化された農業ではなく、自給自足的コマギレ農業であるという。そして、このコマギレ農業は戦争状態の時の方法だ、と自ら解説している。すなわち、自閉的営農法であることを彼も認めているのである。

このような体験を経た後に書かれたのが、「庶民烈伝」その五「べえべえぶし」である。この小説は、主人公善兵衛の歌ういわゆるべえべえぶしの歌詞に作者の解説を付しながら並べていく手法によって、農村の状態を描いており、「楢山節考」と、小説の手法としてはよく似ている。ただ、「楢山節考」の物語性をつくっていた部分がずっと縮少されていて、物語的な面白さはなくなっている。一方、この作品には、農作業などの具体的な描写がなされているのではないのだが、野良で働く農夫の姿、農村生活のイメージが彷彿としてくるのは、やはり作者の体験が生かされたのであろう。一見のどかに見える農村の生活がいかに忍耐を強いられるものであるか、一見素朴な人間関係がいかに陰湿な利害関係のからまったものであるかを手短かに語っている。

「べえべえぶし」の主人公善兵衛は、茄子や胡瓜ばかりをまるでそれらと相撲をとっているかのように食べ、営農に責任を持たない栽培技術指導のために桃や梨を植えては大損をさせられ、というふうで、息子や娘はみんな農村を出て行ってしまったのに、なお一人で一、五ヘクタールの農地を耕していた。しかしその彼も、ある日農薬のためにあえなく死んでしまう。ただそれだけの筋の作品である。作者はこ

の作品において、善兵衛に何かを見いだしているのではなく、亡びゆく古い農村の姿を惜しみ、押し寄せる近代化の波にいまいましい思いを抱いて、それをべえべえぶしの解説にことよせてぶちまけているようである。そして、善兵衛が農薬のために死んだ後で娘がかけつけ、〈とうちゃんはべえべえ歌をもう唄わねえと気がついた。〉ところでこの小説は終わっている。この結末には、作者の、べえべえぶしとそれによって代表される古い農村への哀惜がこめられているように考えられるのである。

そうだとすれば、作者は農業の体験を通して農村の現状を知ることにはなったが、その結果、彼が抱いていた農村に対する幻想が、またしても崩壊するのを見なければならなかったのではないか。すなわち、作者は、現実社会から身を引くつもりで農村に入ったのであったが、そこでまた舞村の現実につきあたらなければならなかったのである。

ところで、作者は辰平や定平に対してかなりの親近感を示していた。と言って悪ければ、かつてはこれらの作中人物と作者との視点が一致することがしばしばあった。ところが、この善兵衛に対しては、作者は客観的視点を守っている。特に善兵衛が農薬をかぶって死んでしまう場面の描き方には、かつて銭屋の又やんに対して示したような冷淡さが見られる。ここには、作者がおくまから身をかわした時と同様の身の処し方が窺われるのである。

5　おわりに

以上、深沢七郎の作品のうち、想像力を主体とした作品群の中から農民を素材としたものを選び、その中に描かれた作中人物と、その作中人物に対する作者の態度の変化の跡をたどってきた。作者は、「楢山節考」の世界において、自己犠牲的な生き方を理想としていた。次いで、「おくま嘘歌」の世界において、情況が変わればその生き方が必ずしも絶対のものでないことが確認されると、「安芸のやぐも唄」において、かつては否定的に見ていた自己肯定的な生き方を許容するようになった。これによってわかることは、作者の思想が、思想と思想との対決を通じて変わっていくのではなく、情況の変化に応じて変わっていくのだということである。そして「安芸のやぐも唄」を書いた時期の作者は、社会から心理的に絶縁されたところで、孤独ではあっても他にわずらわされることのない生き方に注目するようになっている。

一方作者には、一人静かに農業をして暮らしたいという願望があった。その時作者が想像していた農村は、村落共同体的農村ではなく、一人一人が自給自足の生活を営み、人間関係の希薄な社会としての農村であった。すなわち、作者には、社会から退いて安息を求める場所として農村が考えられていたわけである。孤独ではあっても自己本位の生き方をすれば良いのだと考えた作者は、農村への移住を決行した。しかし、農村には農村の現実社会があった。作者は、都会の人間関係から離れて、農村の人間関係の中に移ったにすぎないことを知った。作者は最近ハンガリーへの旅立ちなどを計画中であるという。これもおそらく、日本から脱出したいという願いのもとに考えられているのであろう。このような作者の想像の仕方、行動の様子を見ると、現実と対決したり、現実に溶け込んで生きようとするのではなく、現実から離れ退くことによって安らぎの場所を求めようとしているようであ

る。

それでは、現実の情況の変化に応じて思想を組みかえて現実に適応しようとする心と、現実から退くことによって安息を求めようとする心との二つの方向に働く心が、この作者の中でどのようにからみ合っているか、それが次の問題であるが、その点についてはまた改めて考えてみたい。

付記　本稿が成るにあたっては、磯貝英夫先生から懇切なるご指導を賜わった。記してお礼申し上げる。